

---

# 卵から棺桶まで（詩集）

聖魔光闇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

卵から棺桶まで（詩集）

### 【Nコード】

N7697Q

### 【作者名】

聖魔光闇

### 【あらすじ】

今までに書いた『詩』を全て載せました。私の生み出したいろいろな『詩』を見て下さい。

これは言わば、これまでの私のヒストリーです。

## 日常

朝アラームの音が鳴る。

何度鳴っても起きない僕を妻は起こしてくれる。

「おはよう。」と言つと「おはよう。」と、返してくれる。

台所に行つて朝食を食べる。

後片付けをした後、仕事に行く。

職場では、挨拶をして仕事を始める。

怒られる事もある。

注意を受ける事もある。

褒められる事もある。

しょうもない話をして、笑つたり、怒つたり、怒鳴つたり、泣いたり、落ち込んだり、喜んだり。

そして仕事が終わると家に帰る。

「ただいま」と言つと「おかえり」と家族が迎えてくれる。

家族と夕食を摂り、子供達と風呂に入る。

布団の上でゴロゴロしながら妻や子供達と遊んだり、話したり、

一人でゲームしたり、みんなでゲームしたり。

「おやすみ」と妻が子供達と僕に言つて眠りに入る。

遅くなつたら、妻と子供達は寝ている。

僕はゲームや携帯をやめ、電気を消して『おやすみ』と心の中で  
呟いて眠りに入る。

そしてまた朝がくる。アラームが鳴っている。

そんなくだらない日常。

そんなくだらない日常。

でも、僕にとって大切な日常。

とても大切な日常。

かけがえのない日常。

それは誰にも言える事じゃないだろうか。

そう僕は思いたい。  
そう僕は…思いたい。

## 無色無心

何も見えなかった。

何も聞こえなかった。

何も言いたくなかった。

何も感じなかった。

ただ無になりたかった。

ただ無に帰してしまいたかった。

自分を壊したかった。

汚い自分を壊したかった。

嫌いな自分を壊したかった。

死んでしまいたかった。

自分を殺してしまいたかった。

そして自分を殺そうとした。

自分を壊そうとした。

死んでしまおうとした。

皆は言う「死にたい時ってどんな気持ち？」

答えは明確単純だ。

無心。

無色。

ただ、ただ、壊そうとするだけ。

ただ、ただ、壊れようとするだけ。

ただ、ただ、自分が嫌いになっただけ。

僕は生きている。

僕は存在している。

もう自分を壊したいとは思わない。

もう自分を殺したいとは思わない。

もう死にたいとは思わない。

何故なら…。

何故と言われたら…。

そんな僕に涙を流してくれる人がいるから…。

こんな僕の為に涙を流してくれる人がいるから…。

そんな人達の心を壊したくないから…。

そんな人達の心を殺したくないから…。

僕は、生きて行く。

生きて行く時にも、無色無心で。

無色無心の精神で。

## 操り人形

僕達は生きている。

この地の上で生きている。

この地の上で、がむしゃらに生きている。

私達は生きている。

この地の上で生きている。

この地の上で、がむしゃらに生きている。

でも…それが、かりそめの命だったら…。

本当の命で無かったら…。

人は人に似せて人形を作った。

人形は話さない。

人形は自ら動かない。

でも、僕達私達が人形だったとしたら…。

誰かに似せて創られた存在だとしたら…。

自分で話しているつもりで、話していなかったら…。

人形も自分で動かない。

誰かに動かしてもらって、誰かに話しているかのようにしてもら  
う。

僕達私達も、また誰かに操られているだけだとしたら…。

自分で考え、行動し、結果を出しているつもりでも、誰かに操ら  
れているだけだとしたら…。

感情も、考えも、思いも、行動も、接触も、全て誰かに操られて  
いるとしたら…。

僕達は何なのだろう？

私達は何なのだろう？

そんな悲しい感情が、時折芽生える。

## 現実逃避

気が付いたら、がむしゃらに自転車を漕いでた。  
気が付いたら、住んでた町が遠くに見えた。

遠くに行きたかった。

どこまでも遠くに行きたかった。

だから自転車を漕いだ。

だから無我夢中で自転車を漕いだ。

知らない所に行きたいのに…。

自分を知っている人が、誰もいない所へ行きたいのに…。

気が付いたら、生まれた町だった。

気が付いたら、生まれた町で泣いていた。

自転車漕ぎながら泣いていた。

悲しくなんて無かった。

痛いところなんて無かった。

苦しかった。

息苦しくて、心が苦しかった。

この苦しみから解放してほしかった。

この苦しみを癒してほしかった。

僕は死を選んだ。

僕は死を選んでしまった。

誰も知らない所へ行くために、死を選んだ。  
ただ…苦しみから解放してほしい…だけ…。

目を開けたら病院のベッドの上だった。

僕はまた泣いた。

死ねなかった事に泣いた。

生きている事に泣いた。

僕の為に涙を流してくれる人に泣いた。

いつかまた、死への逃避を行わないように、誰かに僕の為に涙を流させないように、僕は薬を飲んでいく。

薬を飲み続けている。

書きたいように

書きたいから書く。

書きたい事を書きたいように書く。

読んでほしいから書く。

読んだ人がどう思うか知らないけれど、書きたいように書く。

それじゃ、ダメですか？

それじゃ、何も伝わりませんか？

『読んでほしい』これは、書く者の絶対的欲求だと思う。

『読んだら何か言ってほしい』これも、書く者の絶対的欲求だと思う。

でも、書く人と読む人が違うのだから、伝わり方なんて様々、これも必然だと思いませんか？

だから、書きたいように書く。

書きたい気持ちをそのまま文章にして書く。

それじゃ、ダメですか？

それで、良いと思いませんか？

私は私に素直に生きていきたい。

私は私に嘘をついて、生きていくなんて嫌だと思う。

だから、私は書きたいように書いて行こうと思う。

そんな気持ち皆さんは、ありませんか？

これが、表現の自由だとおもいます。

今までも、これからも…。

## 同じで違う

野原に吹く風、森に吹く風。どちらも風だが全く違う。

海の波、川の波、湖の波。全部波だが全く違う。

町に降る雨、野に降る雨、水田に降る雨。同じ雨だが全く違う。

君の声、彼の声、彼女の声、あなたの声、私の声、僕の声。みんな声だけど、みんな違う。

違って当たり前なんだ。

違うから素晴らしいんだ。

同じだったら、つまらない。

同じだったら、何か悲しい。

それでいい。それでいいんだよって言ってやりたい。

全ての人へ。

全ての悩める人へ。

違う事の素晴らしさ。

違う事での感動。

みんなで分かち合ったら、もっと素晴らしくなるんじゃないかなあ。

みんなで分かち合ったら、もっと感動するんじゃないかなあ。

そう、しみじみ思う。

## 心地よい心

想像して下さい。

広大な草原に吹き抜ける風。

『サアー』と草花を揺らし、『そよそよ』と頬に当たる。

天気は、快晴で空には雲一つ見えないのに暑さを全く感じない。

草原の上に空を仰いで倒れ込むと、静かに目を閉じる。

風に押された草花がサラサラ、クスクスと笑い声をあげる。

大きく息を吸い込み、大地と一体になると『ふうふう』とゆつくり息を吐き出し空気の中に溶けていく。

身体は大地になり、心は風になり、広大な草原を自由気ままに駆け巡る。

ふと目を開けると、真っ白な月が草原を照らしだし、草花の妖精になったかのような気になる。

そんな光景を心に持ってみませんか？

きっと何かに疲れた時にあなたを癒してくれるはず…。

僕は悪い子？

昔、婆ちゃんと同じ物に行くといつも『きつさてん』に入った。

いつも婆ちゃんは「冷やこいの食べるか？」と、かき氷をたのんでくれた。

婆ちゃんと買い物に行っただけなのに『きつさてん』の思い出しかない。

婆ちゃんが何を買っただけでもない。

でも『きつさてん』にいつも行って、『きつさてん』でいつも『いちご』のかき氷を食べただけ覚えてる。

僕って勝手だね。都合のいい事だけ覚えててサ。

僕って、『いけない子』なのかなあ？

ねえ。誰か教えてよ。

## もっと自由に

いろいろ考えて、頭がおかしくなりそうな時期があった。

難しい事をいっぱい考えて、生きて行くのが嫌になった時期があった。

ぐだぐだ考えずに気楽に生きていこう。

いろいろ考えて、心を潰すよりも気楽に身軽に生きていこう。

頭がおかしくなるくらい、毎日毎日何かを考えて嫌になって、明日が嫌にならないように。

今日が嫌にならないように。

今が嫌にならないように。

気楽に自由に生きていこう。

自由に勝るものなんてないさ。

もっと肩の力を抜いて、嫌にならないように。

もっと自由気ままに生きていこう。

そっ。思っ……………。

## 訴え

人に何て言われても構わない。  
人がどう思おうが構わない。

書いたモノに感想がついたら嬉しいだろう。良いところも、悪いところも、全部受け止めて。

書いたモノが紹介されたら嬉しいだろう。想いの共感者がいるって感じられるんだから。

「こんな所に書くなよ！」って思う人もいるかもしれない。

けれども敢えて私は、ここにこの『書』を書き留める。

何故なら、ここが自由空間だから。

何故なら、ここが多くの人の目に止まるところだから。

私は敢えて、ここに書く。

私は敢えて、ここに『心の書』を書き留める。

心が訴えるから。

それこそが、『心の訴え』そのものだから。

皆がそうであるごとく、思いつから。

おこがましいかもしれないが、『心の訴え』の代弁者として。

## 書く事・読む事

【話上手は聞き上手】と申します。

それでは【書き上手は読み上手】と言う事になるのでしょうか？

私の心は万物・万人と同じく解読不能なパズルのようなモノ。

しかし、猪突猛進な部分も持ち合わせ、『書く事』に執着心がありある。

これでは【読み上手】どころか【書き上手】にすらなる事は出来ない。

幼少の頃は、書を読むのが好きであった。寝る間を惜しんで書を読んだものだ。

しかし今はどうだ。活字嫌いを筆頭に、読む事を躊躇し、書く事に没頭している。

これでは【話上手は聞き上手】もとい【書き上手は読み上手】に限りになく遠い。

溜息が大きくこぼれる思いだが、しかし頭に溢れ出る思いを止める事叶わず、ここにまた『書』を書き留めている。

人の心に響く『書』を書き留めていきたいと思う一方、心に響く『書』を熟読しなければ、という思いに駆られ私の心は葛藤する。

ああ、我が愛する読者達よ。この心、鎮むる為には如何な手段をとればよいのであろうか。

葛藤の中で葛藤し、私の心は虚無の海に一步踏み出しそうだ。

## 二人生活

僕の思いが、君に分かる筈も無い。

君の思いが、僕に分かる筈も無い。

当たり前さ、これまで別々の環境で育って来たのだから。

これまで、別々のレールの上を歩んで来たのだから。

でも、僕の思いの一片だけでも分かってほしい。

君の思いの一片だけでも理解したい。

僕達は同じレールの上を歩くと決めたのだから。

同じく人生を進めようと決めたのだから。

そう、同じレールの上を同じ歩幅で歩くと決めたのだから。

二人でそう決めたのだから。

美しく、はかない

私は、『死』を『師』と仰ぎ、これを『詩』にたしなめる。

『死』は万物に訪れる必然とした現象。それが天寿を全うしても  
しなくても。

そんな『死』を私は『師』と仰ぐ。

何故ならば『死』は『生』と同じく万物の象徴であり、はかなく  
尊いものだから。

しかし『師』は『死』を迎えてはくれない。

『死』の後に続くものが、必ずしも悲しみの連鎖では無いが、『  
生』の後に悲しみの連鎖は生まれえないから。

だから私は『死』を『師』と仰ぎ、『詩』をたしなめる。

『師』に『死』の尊さを理解してもらおう為に。

『師』に『死』のはかないなかの美しさを知ってもらおう為に。

ここに『死』の『詩』をうたう。

『詩』は、波紋となって広がり、波となる。

その波が『師』に届くまで、私は『死』を『師』として『詩』をうたう。

それこそが、私が『死』を敬愛する【たった一つの手段】なのだから。

『師』は『死』を『詩』として理解してくれるだろうか。

鏡に写る心は…

心の鏡に詩を使う。

心を写して詩に見る。

僕の詩は心を揺さぶるのだろうか？

僕の詩は心を揺さぶれるのだろうか？

あなたの心に響いてますか？

あなたの心に僕の詩は響いてますか？

不安に駆られ、詩が乱れる。

不協和音も一つの詩かも知れないけれど…。

不協和音も心に届くかもしれないけれど…。

僕は澄んだ音色で詩を届けたい。

僕は響く音色で詩を紡ぎたい。

そう思うのは僕のエゴですか？

そう感じるのは僕のエゴですか？

僕の詩は届いてますか？

僕の詩は響いてますか？

僕の詩は不協和音を出していませんか？

あなたの詩で声を聴かせて下さい。

……。

虚無の海にて虚空を感じず

私は今、虚無の海にいる。

『喜』『怒』『哀』『楽』全ての感情を超越し、今、虚無の海に  
浮かんでいる。

何を見ても何も感じず、ただ漠然とした虚空を眺めるだけ。

心が無。こんなに虚しい事はない。

だが、私には今、無しかないのだ。

同じく虚無の海にて虚空を見つめる者よ、応えておくれ。

この虚しき世界において我は何を感じれば良いのか。何を想えば  
良いのか。

私は無。無に對なる者達よ、我を虚無の海より引きずり上げてお  
くれ。もう虚空を見ていたくはないのだ。

私は無。無は私。

ああどうすれば……。

私の心が見えますか？

もし、あなたが光を持たぬ漆黒の闇にいたら何を思いますか？

光を持たぬ、然り光の入り込む余地のない漆黒の闇の中で何を見  
いだしますか？

心は元は色の無いパレットのようなモノ。

この心を漆黒で染めたらどうなるのでしょうか？

私はまだそれを知らない。しかし、それを求めて止まない。何故  
なら、それはきつと誰も経験したことの無いような世界だと思っ  
たら。

人は光あってこそ、人と判別される。

どんなに心に闇を抱えた人でも心に光はある。

だからこそ、私は心を漆黒の闇に包んでみたい。光を持たぬ漆黒  
の闇で。

…。

## クラウディ・タウン

君は何でこの街にきたんだい？そう、女の方は聞いてきた。

心の中の僕は「本当の自分を探すため」と言ったが、本当はそうじゃない。

本当の僕はここにいて、嘘の自分が心の中にいた。

心の中の僕の街はただの偽りの世界だった。

綺麗な空が晴れ渡り透き通った無限に広がる青い空。

下が見えるくらいに透明で美しい川、海。

本当に心がこんなにも綺麗だったら誰も苦労なんかしないさ。

本当に心がこんなにも透き通っていたら誰も悲しんだりしないさ。

現実を見て悲しむくらいならいつそ夢だけを見て悲しみたい。

自分と向き合って泣き叫ぶならいつそ他人と向き合って泣き叫びたい。

どうせなら過去の自分を消し去って前だけを向きたい。

今も嘘の自分は心の街にいかにも本当の自分のように堂々と歩いてる。なんでお前だけ楽しそうなんだよ。と一言言ってやりたいぐらいだ。

今日も天気は曇りです。

## 電腦世界の中で

現在、ネットや携帯がはびこるこの電腦世界において僕は心で繋がる世界に身を置きたいと思った。

昔、メールの出来ない携帯やポケベルよりも、もっと昔。

人が自分の心を、自分の言葉を紙にしたためて他人に送っていた時のように。

僕は今、今現在、心と心で繋がる世界を作ってみたいと思った。

だって、それこそが、人間である証である気がするから。

だって、心こそが、人間に許された形無き表現だと思うから。

僕は……。

僕は……。

心で繋がって…。

## 心の力

街に灯火を照らすように。

街が静寂の眠りにつくように。

私は誰かの心の中の街灯になりたい。

私は誰かの心を静寂で包みたい。

詩<sup>うた</sup>によって、心を動かせるのなら、それは既に詩では無く、原動力であると思うから。

私の心で誰かが、癒やされ。

私の心で誰かにほのかな灯火が灯る。

このような幸せを誰が考えただろうか？

このような喜びを誰が思い付いたのであるうか？

私の心に力があるかは分からない。

けれども、私はこの心に嘘をついつまで、ここに記したく無い。

かけがえのない友、達よ私はあなたの心に何を訴えていますか？

私は光？それとも闇？

暗闇の中で（葛藤）

一筋の光も見えない暗闇の中で私はたたずんでいる。

歩く事も走る事も出来ず、たたずんでいる。

数歩歩くと足が止まる。

頭は心は前を向いているのに、前に進めない。

どちらが前かは分からないけれど、『とにかく進まない』とだけ思っているのに。

進むべき道が見えないからなのか、体が進もうとしないからなのか、もうそれすらも分からない。

長い時間をかけて少しずつ、少しずつ進む。

まだ、光は見つからない。

光があるのか分からなかったが、今は光を探す他に目的がなかった。

『光』 『光は？』 『光を！』 と少しずつ前に進む。

少しずつ、ほんの少しずつ。

『私は、この暗闇から抜け出せるのだろうか』 そんな事すら、頭をよぎる。

時間だけが、刻一刻と過ぎて行く中で私は迷走していた。

私の中で体と心が葛藤していた。

私は光に、届くのだろうか？

この命ある内に…。

命の重さに耐えられぬ者達へ

死に迷う者達よ。

道はそこにある。

人という皮を捨て。

人間という抜け殻を脱ぎ捨て。

今、そこにある『楽』という『無の境地』に足を踏み入れよ。

長く苦しい生よりも、短い苦しみを選ばんとする者達よ。

お前の『楽園』はそこにある。

心という形無きものを剥ぎ取り。

精神という紛い物を拭い取り。

今、そこにある『楽』という『無の境地』に足を踏み入れよ。

無を拒む者達よ。

人の皮を被った獣よ。

この者達を分かってやってはくれないか？

ようやく、サナギより出ずる事が出来るようになったこの者達を。

…ほら、もう見えているのではないか？

## 晴れ後曇り時々雨

雨が降ると僕は思う。

『この空は僕の心』だと。

曇りの日に僕は思う。

『この空は君の心』だと。

晴れた日に僕は思う。

『幸せであるように』と。

空が変われば僕も変わる。

季節が変われば僕も変わる。

当たり前じゃないか、昨日の僕は過去の僕。

今日の僕は今の僕。

明日の僕は未来の僕。

毎日変わって当たり前。

毎日変わって人間なんだ。

雪が降ったら僕は思う。

『心を洗っている』んだと。

日々現実が変わるように僕も変わっていく。

でも大丈夫。

僕は僕だから。

ねえ、君には分かるでしょ。

恋文（まだ見ぬ君へ）

夜風に当たりながら詩をうたう。

夜風の中でタバコを吸い詩をうたう。

虫の音ねと風の音ねを聞きながら詩をうたう。

我は恋をした。まだ見ぬ君に。

私の心は盗まれた。まだ見ぬ君に。

我が心は既にここにあらず宙を舞う。

詩をうたい、詩に酔う。

詩は心。心でうたう。

まだ見ぬ君よ。

私の心を盗みし君よ。

我に詩を聴かせておくれ。

甘美な詩を。

切ない詩を。

喜びの詩を。

苦しむ詩を。

楽しい詩を。

我に聴かせておくれ。

ああ！まだ見ぬ君よ。

君は何処に…。

人生なんてそんなもんさ

人はいつも広野に立っている。

道は無く目印も無い。

選択肢は無限に等しい。

その中の一つを選択し、前へ進む。

選択肢を迫られた時にも複数の選択肢が存在する。

一つしか見えないのは眼が曇まっているから。

無数の選択肢の中から一つをチョイスし前進む。

それは前。必ず前に。

後ろに進んでいるような気がする時も、前に進んでいる。

前に。必ず前に。

進む事に意味がある。

進む事で答えが見付かる。

私達が歩いて来た意味が。

私達が生きてきた意味が…。

## 今、感情

今、生きてる事に感謝はしてない。

何故って、毎日しんどいから。

今、生きてる事に感謝はしてない。

何故って、毎日眠たいから。

今、生きてる事に感謝はしてない。

何故って、毎日生きてる悲しみを感じるから。

今、生きてる事に感謝はしてない。

何故って、まだ時々死にたいから。

生きてる事を悔やんでも仕方ないのは、知っている。

だから、今、生きてる事に感謝はしてないが、後悔もしていない。

何故って、まだ喜びを感じる心が残っているから。

## 苦しみの心

もし人に翼があつたら、周りはみんな白い翼なんだろう。

もし人に翼があつたら、私は漆黒の破れた飛べない翼なんだろう。

私の心は汚けがれている。

私の心は腐くっている。

だから、漆黒の破れた飛べない翼が生えているだろう。

詩の上でしか自分を表現出来ず、現実の私は人の表情を見ながら  
上辺だけで生きている。

こんな私に白い、純白の翼がある訳がない。

私はきつと汚れている。きつと汚れた漆黒の飛べない翼が生える  
人間だ。

でも、一度は飛んでみたい…。

## 詩をつたう

私は詩をつたと表現する。

私は詩を心の写し鏡だと表現する。

私は詩を見ながら聞くモノだと考えている。

なぜなら詩は、短い文章の中に世界を描き、他者の心を揺さぶるから。

なぜなら詩は、その儂い文に全てを費やした命そのものだから。

私は詩をつたと表現する。

詩は宙を舞い心に降り立つ。

喜び・怒り・哀しみ・楽しみ、この全てを短い命の中で強く表現する。

私は詩をつたと表現する。

私が詩で心を動かされるように。

歌も心を動かす力があると思うから。

歌も詩も『うた』だと、そう信じている。

光輝く

世界は光に満ちていた。

何処を探しても闇は見つからない。

世界は 輝きに満ちていく。

私は闇を探し続けた。

光が輝きを増すに連れ私の心は疲弊する。

疲弊した心を休息させる為闇を探す。

探しても探しても見つからない。

私の心は疲れ果てていた。

一刻も早く休息が欲しかった。

それでも光は輝き続け見渡す限り光輝く世界だった。

疲れた心はもう崩壊寸前だった

そして…

ようやく私は闇を見つけた。

自分の足元に小さな闇を…。

じわで…ずっと……

## 能力（ちから）

音楽の能力は偉大だ。

音を聞き、音を感じ、音を身に染めらす事で、心は音に満たされる

絵画の能力は偉大だ。

絵を見て、脳で感じて、眼下に焼き付ける事で、心は色彩に染ま  
ってく。

恋の能力は偉大だ。

恋に溺れ、恋に身を任せ、恋する心を感じる事で、それは愛に変  
わってく。

心の能力は偉大だ。

視覚で、聴覚で、味覚で、嗅覚で、触覚で感じた事全てを音や絵  
の芸術に変えていく。

変わった芸術は、また誰かの心に渡り、色を変色しつつ、また別  
の心へバトンを渡す。

心はこの世で一番偉大な能力ちからかも、  
知らない。

## 心、静閑に

書きたい詩に困った時は目を閉じよう。

書きたい詩で困った時は耳をすませよう。

書きたい詩が止まった時は口ずさもよう。

そこに静かな調べが流れていても、うるさいロックが響いていても、なごか長閑な唄が吹かかれていても、あなたの心に静寂が訪れるでしょう。

そして眼まなこを開き、耳をすました時、あなたはまた新たな詩うたを奏でるでしょう。

誰かの心に染み渡る、あなたの心のこもった詩を・・・

## 悲しみの空

西の空に太陽が沈む時、時折空が真っ赤に染まる。

普通の人が見たら綺麗な夕焼けなんだろうな。

でも、僕の心は歪んでる。

僕の感情は腐っている。

そんな空を見て僕は思う。

『あれが世界の終わりなら。あれが世界の終わりならどんなに素晴らしいだろう』と。

僕は歪んだ心と腐った感情を持った生ける屍だ。

そう思わない？

『これ以上は浮かばない。詩とは短い間に心を込める。2000文字が長過ぎる事もある。それが当たり前じゃないかい？みんなはどう思っっっ。』

鳴り響く

頭の中でずっとナースコールがなっている。

コールを確認しても、本当になっっている時は極めて少ない。

頭の中でずっとナースコールがなっている。

街中でも、車を運転していても、ずっと頭の中で鳴り響く。

もう誰が何を訴えているのかも分からなくなってきた。

頭の中でずっとナースコールがなっている。

誰かが助けを求めている。

助けて欲しいのは私のほうだ。

誰かナースコールを止めて。

誰か幻聴を止めて。

誰か 私を 助けて。

私を  
助けて  
……。

心は何を…

人間、腹が減ったら飯を食う。これはだいたいの奴らが同じだと  
思う。

人間、喉が渴いたら水を飲む。これもだいたいの奴らが同じだと  
思う。

じゃあ、人間心が枯渴したら何を取り入れたらいいんだ？

詩や物語を考えてコトノハに心を乗せる。心を表に流出すると、  
からっぽの器が残る。

最近、タバコと食欲と飲酒が上昇気味。心が何を取り入れたらいい  
いからなくなっていて暴走中。

からっぽの器　ここにを入れる新たな心の元は何処から取るのだから  
うか…

## 光と闇（矛盾）

もうどれだけ経ったのだろうか？私がこの光の中をさまよい続けてから。

光を求め、光輝く地を求めさまよい続けていた。

時には走り、時にはもがき、時には立ち止まりもしたが、光を求め進み続けた。

進み続けて幾ばくか経った時だった、私は光を見つけた。

元より其処にあったのか、誰かが差し出したのかは分からない。

しかし、私は光を見つけた。

……そして光に飛び込んだ。闇の中にいた頃の沈むような心が消え、澄み渡るようだった。

……そう。そんな気がした筈だった。

しかし私は今、闇を探している。

光の中で疲れきった心を癒やす闇を探している。

私に闇を……

そう思い続けて、今、光の中をさまよう……

私は……どうすれば 良いのだ……

## 君に届かない想い

『愛してる』そんな言葉を待つ君。僕もそれを言いたくない訳ではない。

でも、この君への想いはいつまで続くのだろうか。

君の僕への想いはいつまで続いていくのだろうか。

そう思うと僕の心は躊躇する。君へ『愛してる』なんてそんな簡単に言っていないのだろうか。

僕は君をちゃんと愛せていますか？

僕は君の心の中にちゃんと住んでいますか？

君にきちんと聞いた事はないけど……。こんな事、聞ける筈もないけど、でも、僕は君を愛していていいのだろうか。

言葉に出せないけど、でも僕は愛しているからね。

言葉にならない想いで今は伝えるよ。

『ルンペル』

## 闇より出する

漆黒の闇の中で、ただただ虚無を感じて、沈んでいく

沈む私を何か在必死に引き上げようとしている

私は漆黒の闇の中から出るつもりはない

けれども引きずり上げる力の方が強く、私は闇より光の中へ放り出される

……朝……

目覚めの時間 それはこの世で一番悲しい時間

目覚めの悲しさ、生きていくという悲しさ、死んでいないという悲しれ……

また、苦痛の光の空間が扉を開けた

私は今、生きていくという現実を前に、また今日を生きる

明日の事は考えずに

## 苦痛の光

私は闇の中で生無き者の声を聞いた。

こっちへおいで

そう言っていた気がする。

私はもともと、闇の中へ向かおうとしていた。

こっちへおいで

声は次第に強くなったが、私の心は葛藤し始めていた。

こっちへ

そして私は漆黒の翼を求めた。

しかし、漆黒は私を受け入れてくれなかった。

そして、また光の世界へ突き落とされた。

闇よ。漆黒よ。混沌よ。何故私を受け入れてくれない。

そして…今…私は、光の中で苦しみ続けている。



## 暗闇の中で

暗闇の中で一筋の光を見つけた。

その光が何なのかは分からない。

でも、暗闇の中で震えている自分にとって、一片の希望だった。

私は歩み始めた。

その光に向かって歩み始めた。

しかし光は近づく事もせず、遠ざかる事もない。

私は歩むのを止め、走った。

歩む速度で近付けないのならと。

しかし、それでも光に届かない。

あの光が始まりなのか、終点なのかは知らないけれど、私は光に近付きたかった。

息が切れ、もう声も出せない位、喉が枯れていたがそれでも私は走った。

この闇からでる為に。

一筋の光を目指して。

暗闇の中で（苦悩）

進んでも進んでも暗闇は続く

歩いて歩み続けても暗闇は続く

兎に角 前だけを見て進み続けているが…

やはり暗闇は続いている

暗闇に出口を探し迷走する

トンネルを抜ければ闇

トンネルを抜ければ闇

トンネルを抜ければ闇

もう疲れた

暗闇の中で私に根付いた心は闇一つ

そして また歩き出す

時には走り 時には歩み 進む事をやめないで

しかし闇は私を逃がさない

トンネルを抜ければ闇

トンネルを抜ければ闇

トンネルを……

……もう頭が狂ってしまいそうだ……

トンネルを抜ければ……

トンネルを抜け……

トンネルを……

## 空白の心

怒りに身を任せ暴言を吐く

誰かを傷つけているとも知らず暴言を吐く

誰かが傷ついているとも知らず暴言を吐く

怒りに身を任せ暴言の限りを尽くす

言いたい事言って

言いたい放題言って

そして 胸に残るのは

虚しさだけだった

空虚にも等しき

虚無にも等しき

虚しさだけだった

怒りに身を任せても何も良い結果は得られない

だが、どうすれば良いのだ

この胸の憤りを

この心の苦しみを

鎮める為には

どうすれば良いと言っただ

……誰か教えてくれないか……

## 心の天気

気持ち一つで世界は変わる

心一つで世界は変わる

良い事があつた日は

世界は明るい

光輝く世界になる

嫌な事があつた日は

世界は暗い

暗黒の世界になる

気持ち一つで世界は変わる

心一つで世界は変わる

気持ちの気候は変わり易い

心の気候は変わり易い

晴れもある

雨もある

曇りもある

雪もある

それらが一刻一刻と変化していく

変化しながら自我を生成している

そういった変化の中で生きている

そういった気候の中で生きている

……今日の天気は嵐です



それでも私は止まらない

今、私が求めるモノは何なのであろうか

自問自答し考える

しかし答えは見付からない

私は何を求め

何を欲して

進んでいるのだろう

彼方に見えるは

蜃気楼

あやふやで

形を全く成さない

蜃気楼

決して暗闇の中を

歩んでいるわけではない

しかし、暗中模索の思いで進み続ける

未来が見えず

未来を感じる事も出来ず

私は、ただ日々を歩み続けている

あの蜃気楼の向こうには何があるのだろうか

あの蜃気楼の下に辿り着けるのだろうか

暗中模索の思考の中

私は歩み続けている

そう、きつとこの命尽きるまで

そう、行く手に見えるは蜃気楼

未来の彼方も蜃気楼

そうやって生きていくのだと思う

しかし、私は立ち止まらない

立ち止まる事を許されない

それは生きているから

日々が刻一刻と過ぎていくから

私は立ち止まれない

そして自問自答を繰り返す

私は何を求めているのか自問自答を繰り返す

そうして日々は過ぎていく

決して止まる事はない……



小さき者

世の中を

自分の知ってる限りの

世の中を

第三者の視点で

傍観する

世の中を

自分が分かる範囲の

世の中を

空から自分を見るように

傍観する

世の中を

自分を中心とした

世の中を

悟りの境地にたつて

傍観する

私はちつぽけな人間だ

私はなんて小さいのだろう

世の中において

私など小さな小さな存在でしかない

そんな悲しみを覚えた

しかし小さな存在だからこそ

小さな存在だからこそ

私は私で生きていこうと思う

絵の具にいろいろな色があるように

雲にいろいろな形があるように

私は私の色で生きていく

それが小さき者の責務だと思うから

## 苦しみと喜び

私は今、苦しみ続ける

私は今、この世界で苦しみ続ける

この世界で生き

この世界で過ごし

この世界で仕事をし

この世界で学び

この世界で悩み

この世界で交流を持ち

この世界であがき

この世界もがき

この世界で苦しみ続ける

この世界で苦しむ事を続けていく

何故なら

それが、私の喜びを感じる心が変わるから

喜びを感じる心を育むから

喜びを感じる心を作り出していくから

私は今、この世界で苦しみ続ける

苦しみ続け、喜びの心を育て、そうして私は生きていく…

## 死ねずにいた事の罪

希望を失い、この世を去ろうとした私は、生きた屍として、ここに  
まだ生を成す

私は懺悔する

この世に生を成した事を

私は懺悔する

この世に生を産んだ事を

私は懺悔する

この世にまだいる事を

私は懺悔する

喜びや楽しみを感じる事を

死した屍は、何も感じない

死した屍は、心を持つ事はない

生きた屍は、感情を持っている

生きた屍は、心を残している

だから私は懺悔する

喜びや悲しみを感じる代わりに、人に悲しみや苦しみを与えてしま  
う事を…

生きてる事に感謝はしていない

今、生きてる事に感謝はしていない

何故って、毎日朝になるから

今、生きてる事に感謝はしていない

何故って、毎日しんどいから

今、生きてる事に感謝はしていない

何故って、毎日眠たいから

今、生きてる事に感謝はしていない

何故って、毎日仕事に追われているから

今、生きてる事に感謝はしていない

何故って、毎日人と関わらないといけないから

今、生きてる事に感謝はしていない

何故ってお金が全ての世の中だから

今、生きてる事に感謝はしていない

何故って、毎日生きてる悲しみを感じるから

今、生きてる事に感謝はしていない

何故って、まだ時々死にたいから

今、生きてる事に感謝はしていない

何故って、死ぬより苦しい毎日だから

今、生きてる事に感謝はしていない

何故って…

今、生きてる事に感謝はしていない

生きてる事を悔やんでも仕方ないのは、知っている

だから、今、生きてる事に感謝はしてないが、後悔もしていない

何故って、まだ喜びを感じる心が残っているから

何故って、まだ涙を流す心が残っているから

一心不乱・無我夢中

私は走る

走り続ける

理由は…

何だったかな

………

あつたような

無かった訳はないな

けど、もうそれも

どうでもいい

私は走るのだ

走り続けるのだ

とにかく走り

走り続ける

で、何処へ行くのか

それは……

分からない

覚えてない

とりあえず

走るだけ

走り続けるだけ

とにかく走る

ひたすら走る

無我夢中で走る

一心不乱に走る

走って走って走って……

何故なら

それが

人生だから

それが

生きているって事だから

それが

明日へ続く

全力だつて

信じているから

信じるしかないから

だから

走る

全力で

信じる事を忘れずに……

一寸先は闇

『一寸先は闇』

こんな言葉がある

これって人生そのものだろ

と、私は思う

『一寸先は闇』

人生って未来が見えないんだよね

だから今を懸命に生きるのさ

だけど、挫折もする

『一寸先は闇』

この言葉自体がさ

人生の教訓だよ

未来が明るいつてそんなの嘘だよ

『一寸先は闇』

生きていくには必要な事

闇だから探すんだ

闇だから模索するんだ

『一寸先は闇』

『一寸先は闇』

そう考えたら、人生軽く乗り越えられないかなあ

そう考えたら、もっと気楽に生きられないかなあ

未来の予測なんて誰にも出来やしないのさ

だから模索して、手探りで自分の道探して、自分の道切り開いて、自分の人生ってヤツを作っていくんじゃないのかなあ

『一寸先は闇』

一見、嫌な言葉にも聞こえるけれど、自分の人生を切り開く道標になるありがたい言葉だって思うよね

『一寸先は闇』

そうやって生きていこうよ

難しく考えないでさ

どうにでもなるさ

どうせ、一寸先は闇なんだから

だろ？

## 偽りの自分

私は道化師

他人を引き立てるのが仕事

私は道化師

涙は隠していつも笑っている

私は道化師

嫌な事にもN oとは言わない

私は道化師

嫌な事にもN oとは言えない

私は道化師

いつもみんなの笑われ者

私は道化師

他人の言葉に逆らわない

私は道化師

他人の言葉に逆らえない

私は道化師

私は…道化師…

ねえ…

いつになったら本当に笑えるの？  
いつになったら泣いてもいいの？

いつになったら文句が言えるの？  
いつになったら自分が出せるの？  
いつに…なったら…

私は…

## 拭う事の出来ぬモノ

苦しみも喜びも悲しみも楽しさも全て飲み込んで

朝の安らかな息吹に身をさらし、私は哀しみを感じる

昼の焼け付く息吹に身をさらし、私は苦しみを感じる

夜の凍てつく息吹に身をさらし、私は孤独を感じる

私は苦痛に苛まれながら、世界を歩く

私は痛みを感じながら、世界を歩む

この世界で私は命を削って生きていく

この世界で私は心を燃やして生きていく

そう、それが人生だから

そう、それが人の道だから

それが人の生業だから…

## 心の枯渇

私は心という虚ろな画用紙に、携帯というパレットと筆を使い、言葉という絵の具で色を塗り、詩や物語というモノを描いていく。

しかし、私の画用紙は油が染み込み、絵の具を全て弾いていく。

画用紙からはみ出た絵の具は、魂という空虚の中に飲み込まれ、涙という雫になる。

私の画用紙は、いつから油が染み付いたのだろう。これでは、パレットを握っても筆を握っても、私は何も描けない。

ただ雫が落ちるだけ。

ただ、涙を流すだけ…。

## 箱（人間の生きる場所）

私は箱の中にいる

箱のような世界にいる

箱の中で生きている

前を見たら家族という壁

横を見たら仕事という壁

反対を見たら立場という壁

上を見たら上司や親、配偶者という圧迫した壁

後ろを向いても、余暇という曖昧な壁が私を取り囲んでいる

毎日毎日、箱の中で転がりながら、もがきながら、一日が過ぎていく

そして私は箱の底面で眠りにつく

箱から出る事は叶わない

箱の中を転がり、箱の中で眠る

そんな人生

そんな味気ない人生

人生は箱という監獄の中にある

## 精神の苦しみ

私は気が狂っている

昨日の記憶がない

昨日の晩の記憶がない

何をして、何をしたかも覚えていない

今朝、目が覚めて真実を知った

全く覚えていない

私は昨日の記憶を消したかったのではない

今日、明日、その未来の記憶を消したかっただけだった

私が誰で

私の家族が誰で

私の親が誰で

私が何の仕事をしていて

私が一体何者なのかを忘れたかった

しかし

私は覚えている

昨日の記憶は残ってないが

私が誰かを覚えている

私の家族を覚えている

私の親を覚えている

私の仕事を覚えている

私は

私は

私は気が狂いそうだ

私の頭が狂いそうだ

死は望んでいない

心の死を望んでいる

精神の死を望んでいる

今後も苦しみは絶えない

今後も苦しみは続く

苦しみは絶えない

心

心は唄をつたう

心は唄を奏でる

心は唄を感じる

でも

心が壊れる事もある

心が崩れる事もある

心が崩壊する事もある

だから

心に水をあげましょう

心に栄養をあげましょう

心に心を与えましょう

そして

心を綺麗に育てましょう

心を立派に育てましょう

心を優しく育てましょう

結果

心を心で温めましょう

心を心で包みましょう

心を心で癒やしましょう

それが、心を育むという事です

安らぎを与え、心を解放させてあげましょう

そうしないと……心は死んでしまいますよ

そうしないと……心は死を求めてしまいますよ

私のように

私のようになってはいけません

私は反面教師です

私のようになってはいけません

私のように…なつては…いけません…

薄暗い部屋の中で

薄暗い部屋の中で家族を眺める

薄暗い部屋の中で自分を見つめる

寒いのに布団に入ろうとしない

眠いのに布団に入ろうとしない

薄暗い部屋の中で

布団の上に座って

家族を眺める

自分を見つめる

自分が何をしたいのかも分からない

自分が何をしているのかも分からない

ただぼくと

薄暗い部屋の中で家族を眺める

薄暗い部屋の中で自分を見つめる

寒いのに布団に入ろうとしない

眠いのに布団に入ろうとしない

薄暗い部屋の中で

布団の上に座って

家族を眺める

自分を見つめる

ただそれだけ

ただそれだけ

ただ、それだけを行う

私は頭の病気です

私は心の病気です

私は気持ちの病気です

私は何がしたいのか

……

流れる雲を眺めながら……

空に流れる雲を見た。

それぞれ形が違う。

違う形のそれぞれの雲が形を変えながら流れていく。

くつついたり、離れたりしながら流れていく。

そんな雲を眺めながら私は思う。

そんな雲を見詰めながら私は思う。

『人も同じなのかなあ』と。

人の心も移りゆく。

空を流れる雲のように。

人の心も変化する。

形を変える雲のように。

『人の心も雲と同じなのかなあ』

『人の心も移り変わっていくのかなあ』

そんな風に思えたら私の心の重りも軽くなるのだろうか。

## 弱き心（衰弱した心の断片）

僕は生きていくだけの無価値な人間です

僕は生きていくというだけの無価値な人間です

生きていくという事が無価値なのか

人間であるという事が無価値なのかは分かりません

僕を殺して下さい

精神的に殺戮するのではなく

肉体的に殺戮して下さい

僕は生きていくだけの無価値な人間

僕は生きていくというだけの無価値な人間

生きていく価値などない

自分で自分を殺せない

自分で命を絶つ事が出来ない

だから僕を殺して下さい

僕は弱い人間です

僕は本当に弱い人間です

死を……お願い……

その時僕は…

夢を見た。

手首を切断して死ぬ夢を

その時、僕は笑ってた

夢を見た

首を切って死ぬ夢を

その時、僕は笑ってた

夢を見た

業火に焼かれて死ぬ夢を

その時、僕は笑ってた

夢を見た

高い所から落ちて死ぬ夢を

その時、僕は逆さの人に笑顔で挨拶していた

夢を見た

車に跳ねられ死ぬ夢を

その時、僕は車体の上を転がりながら笑ってた

夢を見た

電車に当たって死ぬ夢を

その時、僕は電車に立ち塞がり高らかに笑ってた

夢を見た

夢を見た

夢を見た

何度死ぬ夢を見ても、僕は笑ってる

何度死ぬ夢を見ても、僕は生きている

何度死ぬ夢を見ても、僕は死ぬ事を許されない

もう本当に死にたい

## 深い闇の中から

私は漆黒をさまよっていた

自分の身の回りに光がある事にも気付かず

漆黒の中を這いずり回っていた

私は目標を見失っていた

目標、目的という小さな曖昧な光から目を背けていた

漆黒の中を這いずり回り、もう心が疲弊した頃

私の心の中に直接、光の手が差し伸べられた

それは神々しくて眩しかった

しかし、疲弊した私の心はその手を握り返していた

私は漆黒の中から目標という小さな光が見える場所へと引き上げられた

その目標という小さな光はものすごく曖昧だ

しかし曖昧でも、それは私の道標となった

私は歩んで行こうと思う

その曖昧な目標を目指して

その曖昧な目標を道標にして

もう一度と漆黒に引きずり込まれないよう

光の絶えない道を歩んで行こうと思う

そう誓った

## 自分と他人

私の見ている風景は、他人が見ている風景と同じなのだろうか

他人の見ている風景は、私の見ている風景と同じなのだろうか

私が見ている空は、他人が見ている空と同じなのだろうか

他人が見ている空は、私が見ている空と同じなのだろうか

私が見ている街並みは、他人が見ている街並みと同じなのだろうか

他人が見ている街並みは、私が見ている街並みと同じなのだろうか

自分と他人、同じ人間だけど、きっと見ている風景は、少しずつ違っていると思う

自分と他人、同じ人間だけど、きっと見ている空は、少しずつ違っていていると思う

自分と他人、同じ人間だけど、きっと見ている街並みは、少しずつ違っていると思う

だって、自分と他人は同じ人間だけど、別々の人格があるんだもの  
だって、自分と他人は同じ人間だけど、別々の性格なんだもの  
だって、自分と他人は同じ人間だけど、別々の考え方があるんだ  
もの

そう、それでいい

人間なんて十人十色

人間なんて千差万別

だから、それでいい

心は脆く儂い……しかし……

病んだ心が癒やされた途端、私は闇に足を踏み込んだ

病んだ心が癒やされた途端、私は漆黒に心を奪われてしまった

病んだ心が癒やされた途端、私は空虚に迷い込んでしまった

病んだ心をもう病まないように決めたのに、私の心は闇に足を踏み込んだ

病んだ心をもう病まないように決めたのに、私の心は漆黒に身を奪われた

病んだ心をもう病まないように決めたのに、私の心は空虚に包み込まれてしまった

人生、山あり谷あり

私は今、山の頂にいるのだろうか

私は今、谷の奥底にいるのだろうか

もう、それすらも分からない

しかし、また進む決意は消えていない

## 意気消沈

暗闇の中でチカチカと今にも消えそうな街灯を見て思う

まるで私の想いのようだ

暗闇の中でチカチカと今にも消えそうな街灯を見て思う

まるで私の心のようだ

暗闇の中でチカチカと今にも消えそうな街灯を見て思う

まるで私の気持ちのようだ

暗闇の中でチカチカと今にも消えそうな街灯を見て思う

まるで私の魂の叫びのようだ

暗闇の中でチカチカと今にも消えそうな街灯を見て思う

まるで私の感情のようだと

暗闇の中でチカチカと今にも消えそうなの……

## 物書きの独り言

私は独りでモノを書く

私は独りでモノを描く

私は独りでモノを考える

書いたモノには命がある

描いたモノには魂がある

考えたモノには心がある

私の命は書にしたためた

私の魂は書にしたためた

私の心は書にしたためた

読んでくれる人がいる

感想をくれる人がいる

批判を入れる人がいる

だから、私は書き続ける

読んでくれる人がいるから書けるのだ

感想をくれる人がいるから書けるのだ

批判を入れる人がいるから次への一歩とするのだ

私は物書きの才能はない

しかし、私は書き続ける

なぜなら、読んでくれる人がいるから

命を魂を心を読んでくれる人がいるから

感想や批判を受け取る為に、自分を磨く為に

私は……書き続ける……

## 無味無臭

心に言葉を求めても

何も心に浮かばない

心に気持ちを浮かべても

何も心に届かない

言葉で気持ちを作っても

気持ちのこもった言葉は出来ない

今、私の心は無心に近い

今、私の心は静寂に近い

今、私の心は空虚に近い

心に言葉を求めても

何も心に浮かばない

心に気持ちを浮かべても

何も心に届かない

言葉で気持ちを作っても

気持ちのこもった言葉は出来ない

今の私は無味無臭

そう、例えるならば無味無臭

私の心は無味無臭

何も感じない

何も思わない

何も届かない

何も伝わらない

何も言葉に出来ない

無味無臭



吐きそうな不安

戦地に再赴任した

不安感で視界がくもる

頭では分かっているつもりでも身体がついてこない

戦地に再赴任した

不安感で胸が潰れそうだ

頭では分かっているつもりでも心が順応しない

戦地に再赴任した

不安感で頭が狂いそうだ

平常心を保とうとすればするほどドツボにはまっていく

仕事を行わないと、生きていけない

しかし、仕事に集中する気力は喪失状態

不安感は、いろいろなモノを呼び寄せて大きくなっていく

私の完全なる戦地復帰はいつになるのだろうか

命より大切なモノ

僕の心はイカれてる

僕の心は壊れてる

そんな僕の心を癒やしてくれる人がいる

そんな僕の心に心をつないでくれる人がいる

僕の命は軽いモノだと思っていた

ヘリウムガスより軽いモノだと思っていた

そんな僕の命を大切だと言ってくれる人がいる

そんな僕の命を守ってくれる人がいる

そんな人がすぐ傍にいる

そんな人が手をつないでくれる

手と手をつないで、心と心をつないでくれる

僕の命が大切だと手をつないで守ってくれる

だから僕は生きていかなければならない

だから僕は生きていこうと決めた

矛盾するけど、この命に代えても

そう、この命が続く限りその人の為に生きていこうと思う

僕は心のイカれてた人間です

僕は心の壊れた人間です

僕は軽い命の人間です

ヘリウムガスより軽い命の人間です

でも、手と心をつないでくれる人の為に生きていこうと思います

だって、その人の事が好きだから

命に代えても守りたい位好きだから

だから、生きて……いく

## 独り言

俺は無能だ

生きてる意味が分からない

生きてる価値も分からない

けれども

死ぬ意味も分からない

死ぬ価値も分からない

だから

能動的に生きていく

能動的に生かされている

俺は無能だ

でも

無能は無能でいいじゃないか

誰かが何かを見つけてくれるかもしれない

自分で何かを見つけてくれるかもしれない

だから

それまで

無能でいいじゃないか

俺は無能で生きていく

生きてる意味も

生きてる価値も

死ぬ意味も

死ぬ価値も

分からないけど

それが

俺にとって

良い事なのか

悪い事なのか

分からないけど



## 暗闇の中で（今）

歩いているつもりで  
足踏みをしているようだ

進んでいるつもりで  
足踏みをしているようだ

いくら周りを見渡しても  
景色は全く変わらない

どれだけ進んだつもりでも  
景色は全く変わらない

暗黒の中で歩み続ける  
暗黒の中で進み続ける

景色は全く変わらない  
その場で足踏みしているように感じる

それでも私は歩む  
それでも私は進む

前を見て  
前だけをただ見つめて

暗黒に包まれた真っ暗闇の中で  
暗黒に包まれた真っ暗闇の中で前だけを見つめて

私は歩み続ける  
私は進み続ける

それこそが  
生きている証拠だから

## 悩み苦しみ

よくある事なのか

あまりない事なのか

分からない出来事は

私の

現実を

奪っていった

よくある事なのか

あまりない事なのか

分からない出来事は

私の

現実を

奪っていった

よくある事なのか

あまりない事なのか

分からないこの病は

私の

現実も

真実も

奪い去っていった

私は

気楽に

生きていくことと思う

そう思わないと

心が壊れそうだ

私は

気楽に

暮らしていきたく思う

そう思わないと

心が崩壊しそうだ

私の人生は……

どっぴ……

繋がって……

いるのだろうか……

## 大事な事

私は忘れていた

私はピエロだった

怒っている時も

泣いてる時も

寂しい時も

人を笑わせる

ピエロだった

怒っている人も

泣いてる人も

悲しんでいる人も

笑顔にさせる

ピエロだった

苦しい時も

悲しい時も

悩める時も

人を笑わせる

ピエロだった

どんなに

自分が苦しくても

どんなに

自分がつらくても

どんなに

自分が悲しくても

どんなに

自分みじめでも

人を笑わせる

人に笑顔を与える

人に笑顔をプレゼントする

ピエロだった

ピ  
エ  
ロ

私  
は

忘  
れ  
て  
い  
た

私  
は

そ  
う

大事な事を

忘れて

いた

## 生き方

「頑張ったらあかん」

「頑張ったらあかん」

そう思い続けて生きてきた。

でも現実はずう

毎日毎日、頑張って周りの人達に迷惑を掛けないようにって頑張って、頑張って生きていく

「頑張ったらあかん。ぼちぼちやんな」

「頑張ったらあかん。ぼちぼちや、ぼちぼち」

って思っているけど、結局は頑張って、自分の心に重荷をどんどん背負い込んで

「頑張ったらあかん」

「頑張ったらあかん」

こんな言葉だけが頭を回り続ける

そんな中で気が付いた

今まで頑張る事で生きてきた人間が、頑張ったらあかんって言葉だけで、簡単に変われる筈ないって

「頑張ったらあかん」

「頑張ったらあかん」

一応頭の片隅には置いていて  
私は私らしい生き方をしていく  
それで、心は軽くなるのだろうか

「頑張ったらあかん」

「頑張ったらあかん」

## 在るべき姿

毎日見ている風景は

毎日同じで

毎日違う

毎日見ている風景を

見ている私の目は

毎日同じで

毎日違う

時には暗くもやがかかり

時には暗黒に包まれ

時には光輝き

時にはまぶしく

感じられる

しかし私は

毎日同じ人間で

毎日違う人間で

毎日同じ人格で

毎日違う人格で

毎日同じ性格で  
毎日違う性格で

そうやって

毎日を同じように生きながら  
毎日を違った見方で生きていく

だからこそ

私は人間であるのだと思う

だからこそ

私は人間であり続けるのだと思う

そう

それこそが

人の真理ではないだろうか

## 人が人である証

私の心は欠けている

いや、心は皆欠けている

全てのピースの揃った心など存在しない

全てのピースの揃った心など存在する筈がない

何故なら

人の心は

何か

欠けているからだ

人の心はどこか欠けているからだ

全てのピースが揃った心を持った者がいるならば  
それは神に他ならない

心のピースが全て揃った者がいるならば  
それは仏に他ならない

心は常に欠けている  
心のピースは欠けている  
常にピースは欠けている

欠けた心が

人の

証だ

違うかい？

だから

私の心は欠けている

## 貯水池

決壊したダムは修復が難しい

心のダムも決壊すると修復は難しい

いくら ダムの中を

空っぽに してから

簡易的に 修復作業を

行っても 簡易修復では

ダムの中が いっぱいになると

また ダムは決壊する

心のダムも 同じである

決壊して 心が

溢れ出して 心が

空っぽに なってから

心の修復を 行っても

心に ストレスという

水を 溜め込む事で

簡易修復した 心のダムは

再度 決壊する

決壊したダムは頑丈に修復しなければならぬ

二度と決壊しないように頑丈に修復しなければならぬ

心のダムも頑丈に修復しなければならぬ

決壊する事のないように頑丈に修復しなければならぬ

そうしなければ……

決壊は繰り返される……

## 生きていけば

前を見て歩まなければならない

ただ

前だけを見て歩まなければならない

人生は

山あり谷ありの連続で

楽しい事もある

悲しい事もある

嬉しい事もある

ツライ事もある

それでも人は

前を見て歩まなければならない

悲しみに暮れる日があるうとも

苦しみに暮れる日があるうとも

ただ、ただ

前を見て歩まなければならない

後ろを振り返るのは勝手さ

後ろを見詰める事だってあるさ  
けど

どれだけ後ろを振り返っても

人生に逆走なんてないんだよ

だから

前を見て歩まなければならないのさ

ただ

前だけを見て歩まなければならないのさ

そうして

年を重ねて

生きていくのだから

## 生命の希望

吹き荒む嵐の中を  
進んで行く

炎天下の砂漠の中を  
進んで行く

前も見えない吹雪の中を  
進んで行く

明るくても  
真っ暗な  
闇の中を  
進んで行くような  
人生だけど

滝のような豪雨の中を  
進んで行く

覆い茂る密林の中を  
進んで行く

前も見えない濃霧の中を  
進んで行く

明るくても  
真っ暗な  
闇の中を  
進んで行くような  
人生だけど

そこに暖かな光があるから  
人は前に進んで行けるんだ

此処に暖かな温もりがあるから  
人は前に進んで行けるんだ

七転八倒  
七転び八起き

何度  
躓いたって  
何度  
転んだって

人は  
傍にある  
仄かな  
光に  
仄かな  
温もりに  
励まされながら

生きていくんだ

## 生命の奇跡

この世に

命を受けて

今 ここに いる

この世界で

生まれてきて

今 ここに いる

コレが

全て

奇跡なんだ

当たり前のように

生活を営みながら

今 ここに いる

当たり前のように

人類を慈しみながら

今 ここに いる

コレが

全て

奇跡なんだ

子供の寝息を

聞きながら

今 ここに いる

世界の静寂を

聞きながら

今 ここに いる

コレが

全て

奇跡なんだ

生まれてきた事も

奇跡だったら

生きている事も

奇跡なんだ

生活している事も

奇跡だったら

静かに眠れる事も

奇跡なんだ

私達は

この

奇跡に

感謝して  
生きていく

私達は  
この  
奇跡に  
傲る事なく  
生きていく

私達は  
この  
奇跡を  
愛おしいと  
感じながら  
生きていく

生命という  
奇跡は  
未来永劫  
続いていく

生命の循環が終わらぬ限り

## 人生のレシピ

人は  
この世に  
生を受け  
個人の  
人生を  
歩んでいく

人は  
この世で  
生を受け  
それぞれの  
人生を  
歩んでいく

生きる為に  
その手本なんてないんだよ  
生きる為に  
その教科書なんてないんだよ

人は  
この世界に  
生を受け  
自らの  
人生を  
歩んでいく

人は  
この世界で  
生を受け  
自ら  
人生を  
構築し  
歩んでいく

この世に生きる為の  
手本なんてどこにもないんだよ  
この世界のどこにも  
個人を構築する  
手本なんてどこにもないんだよ

人生にはレシピなんて  
存在しない

人それぞれが  
自分という  
人間のレシピを  
構築しながら  
描きながら

試行錯誤しながら  
自分という人生のレシピを作り上げていくんだ

ふふふ

今

この眼まなこに映るモノは

現実か それとも 真実か

今

この眼に映るモノは

夢か それとも 幻か

今

この眼に映るモノは

幻想か それとも 実状か

生きている

私は まだ

生きている

この 現まっの 世に おいて

眼を開き

耳をすまし

匂いを嗅ぎ

空気を吸い

物を食べ

気配を感じ

生きている

今

この眼に映るモノが

現実だろうが

真実だろうが

夢だろうが

幻だろうが

幻想だろうが

実状だろうが

私は 生きて

私は 生きて

私を 死んだように 生かした奴らを

呪ってやる

呪い

怨み

続けてやる

私は 狂った ピエロ

ピエロは 狂うと

血の涙を流し

不気味な 笑みを 浮かべる

呪って 怨んで

呪って 怨んで



## ネガティブ思考

壊したかった

過去は

崩壊する事もなく

無くしたかった

過去も

記憶に残ったまま

壊したくなかった

現実には

崩壊してしまい

無くしたくなかった

現実には

無情にも過去の栄光になった

家族と

楽しく暮らし

仕事を

楽しく行い

公私を

楽しく両立し

苦しくない

人生を望んでいたにも関わらず

仕事を無くし

家庭内で惰眠を貪る

ただの

役立たずに成り下がった

周りに 気を使い

周りに 懺悔しながら

周りを 気にして

後悔だけが

頭をグルグルと

廻る

壊したかった

過去は

壊れる事なく

無くしたかった

過去も

記憶に留めたまま

壊したくなかった

現実が

崩壊してなくなり

無くしたくなかった

現実も

今はもう

過去の産物に成り下がった

《大器晩成》

その言葉だけが

今の

唯一の

頼り

《大器晩成》

もう

後が無い

《四面楚歌》

悪い方へと

意識は傾くばかり



命在るが故に

毎日 毎日

朝日が 上り

毎日 毎日

夕陽が 沈む

毎日 毎日

朝が 始まり

毎日 毎日

眠りに つく

世界に 存在するモノは

毎日 毎日

新たな 命を 授かり

毎日 毎日

その 命を まっとうしていく

形 在るものは いつか 砕け散り

命 在るものは いつか 天寿を終える

命 在るものは 苦しみの中に 喜びを 見いだし

命 在るものは 悲しみの中に 楽しみを 見いだし

世に 天寿が 在るのなら  
世に 滅びが 在るのなら

何故 人は 産まれるのだろうか  
何故 人は この世に 生を成すのだろうか

滅びるが 運命の 生を  
滅びるが 運命の 文明を

人に 探求心が あるのなら  
人に 探究心が あるのなら

これこそが 永遠の テーマでは ないだろうか  
これこそが 久遠の テーマでは ないだろうか

## 旅という名の物語

生命はいつでも旅の途中

旅の中で 自分自身という 物語を 紡ぎ出していく

起承転結を いくつも 繰り返す

同じ主人公なのに 違った 起承転結を 繰り返し続ける

自分自身の 物語の 終着点は 自分自身では 見る事は 出来な  
いが

人は その物語の 終着点へと 物語を 紡ぎ続ける

誰も 自分が 物語を 紡いでいるなんて 思っていないけど  
誰しもが それぞれの 物語を紡いでいるんだ

人は 皆 生きている

人は 皆 生き続けていく

命 尽きても

天寿を 全う しようとも

誰かの 心と共に 生きていく

かく言う 私も まだ 旅の途中

私は まだ 自分の 物語を 紡ぎ続けている

人へ

雑誌のページをめくるように

単行本のページをめくるように

漫画のページをめくるように

小説のページをめくるように

人間の生きていくページも変わっていく

傷付く事を恐れ

傷付ける事を恐れ

苦しむ事を恐れ

苦しめる事を恐れ

喜びを求め

喜びを与え

快楽を求め

快楽を与え

笑い

泣き

怒り

そして 無表情になりながら

心は恐れるモノと求めるモノを試行錯誤しながら

生というわだかまりを全うしていく

蛇行した人生だろうが

実直な人生だろうが

人の生きる道に 大きな違いなど存在しない

今を 生きる者よ

苦しむ事なかれ

悩める事なかれ

生とは 元より

苦しみに満ちたものなのだから

だからこそ

喜びを感じる事が出来るのではないか

## 証として

夢は 現実とは かけ離れている

夢は 現実には 成りかねない

理想とした夢は  
現実という壁に  
阻まれて 虚空の中に消えていった

理想という夢は  
実現しない壁に  
阻まれて 虚無の中にかき消された

自分の 目指したモノが 夢だったのか  
自分の 行った事が 夢だったのか  
もう それすらも わからない

夢は 現実とは かけ離れている

夢は 現実には 成りかねない

そんな事は分かっている  
そんな事は重々承知している

しかし 夢を 叶える事が

私の夢なんだ

夢をみる事が夢なんだ

生きている証として

夢は 現実とは かけ離れている

夢は 現実には 成りかねない

それを いつか 突き破る

そう信じて……

## 普遍

どれだけ 叫んでも  
変わらない

過去は 二度と  
戻ってこない

どれだけ 叫んでも  
変わらない

今の 状況は  
好転しない

どれだけ 叫んでも  
変わらない

未来は いつでも  
不透明なまま

どれだけ 叫んでも  
変わらない  
どれだけ 叫んでも  
変わる筈もない

人の生きる道には  
苦痛が伴い  
身体だけでなく 心にも  
その苦は降り注ぐ

生きる為には  
他生物を補食し  
生きる為には  
水分を体内に取り込み  
生きる為には  
他者と愛を育み  
生きる為には

言葉の刃で 他者を傷付ける  
人は 神の 出来損ないだ  
言葉を 持つにも 関わらず  
愛を育むだけでなく 他者を傷付ける

どれだけ 叫んでも  
変わらない  
どれだけ 叫んでも  
変わる筈もない  
どれだけ 叫んでも

人は 人でしか あり続けるしかない



## 始終

人は

闇より 出でて

闇に帰っていく

初めて 目を開いた時

ぼんやりとした 光しか見えなかった

人は

闇より 出でて

闇に帰っていく

初めて 音を聞いた時

耳を塞ぎたくなるような 騒音だった

人は

闇より 出でて

闇に帰っていく

初めて 匂いを嗅いだ時

鼻をつまみたくなるような 異臭だった

人は

闇より 出でて

闇に帰っていく

自然の摂理には  
逆らう事すら 叶わない

闇より出ずる 人間は

闇の 心を 絶えず 持ち続ける

光を求め 闇をさまよい

光を探し 闇でさまよい

人間なんて 所詮 そんなものさ

短い 命の中で

短い 喜びを探し

短い 楽しみを求め

そして 朽ちていく

他者を 傷付け

他者を 蔑み

他者を 蹂躪し

他者を 踏み倒し

他者を 足蹴にしながら

自分の人生を 歩む

闇より 出でた 人間は

結局 闇の 心を 忘れない

寂しい事さ

虚しい事さ

だから 人間は  
出来損ないなんだよ

せつかく  
言葉という 高文明を  
持っているのにさ

人は  
闇より 出でて  
闇に帰っていく

そう 始まりと 終わりは 皆 一緒なのさ

## 今思う事

暗闇の中で思う

携帯の光を見ながら思う

そうさ

初めは 本当に 小説家になりたいと思った

でも 無理だと悟った

それでも 詩や 小さな物語を書く

今になっては ただの 趣味だ

それでも いいじゃないか

誰かに 読んで貰って

誰かに 感想を貰って

誰かに 評価を貰って

それでも いいじゃないか

今の 現状を 無駄と 言うな

この 趣味を 無駄と 言うな

自分の 描いた 物語が

自分の 紡いだ 詩が

誰かの 目に とまり  
誰かの 頭に 入り  
誰かに 何か 伝わったら  
素晴らしい事じゃないか

こんな 素晴らしい 表現の場が 何処にある

そう 思い ただ 書き続ける

今の私は 小さな詩人

## 世界の一部として

光り輝く世界の中で

世界の時間は止まる事無く進んでいく

僕がどれだけ暗闇を迷走しようとも

光り輝く世界の中で

人間の時間は止まる事無く進んでいく

暗闇を迷走する人がどれだけいようとも

光り輝く世界の中で

社会という時間は止まる事を知らない

社会に適応出来ない者がどれだけいようとも

光り輝く世界の中で

僕の世界は暗黒に包まれている

どれだけ太陽の光が世界を照らそうとも

人間は止まる事のない時間の中で

立ち止まる事を許されず

ただ一秒一秒と時を刻み続ける

病に倒れようが

気力を失おうが

意識を失おうが

混沌に飲まれようが

時間は立ち止まる事を許さない

どれだけ懇願しても

どれだけ号泣しても

”時間よ止まれ”と

願おうが

拝もうが

跪こうが

時間は決して止まる事はない

人の進むべき道は

険しく安全などない

一秒一秒に選択肢をせまられ

一秒一秒に決定権を委ねられ

一秒一秒進むべき道を自ら選択して前へ進む

後悔する事があっても

落胆する事があっても

振り返る事は許されても

後戻りする事は許されない

どれだけ自分の人生を振り返り

どれだけ自分の選択を振り返り

どれだけ自分の生活を振り返っても

そこに見えるのは

過去という現実の一部だけ

過去を塗り替える事は出来ず

過去を訂正する事も出来ず

過去に戻る事も出来ず

過去に過ちがあれば

未来にその過ちを繰り返さないように努力するのみ

光り輝く世界において

絶対的な権力を保持するのは

時間をおいて他ならない

時間は全てを飲み込み

時間は全てを流し去り

時間は全てを押し進め

時間は全てにおいて絶対的権力として存在する

この世界に生あるモノは時間に逆らう事を許されず

この世界に生あるモノは全て時間に支配されている

僕の世界は闇に覆われている

光り輝く世界の中で

太陽の光がどれだけ降り注ごうが

僕の世界の闇に覆われている

この闇を振り払うのもまた

時間という支配者なのだろうか

光り輝く世界の中で

世界は闇に覆われている

金や権力に心を奪われ

義理や人情を欠いていく

人よ

この世界の支配者は時間という目に見えぬモノ

この光り輝く世界の中で

時間に逆らわず

時間に逆らう事を許されず

前を見て進もう

時間と共に

時間を友に

## 不浄な感情

人は人を裏切る生き物だ

人は人を信じきれない生き物だ

自分の周りの人間を

本当は信じていたくて

自分との境界を少なくする

自分の周りの人間を

本当に信じていたくて

周りとの調和をとろうとする

しかし人は

裏切る

裏切る事が多い

裏切られた人間が

どのように傷付き

どのように嘆き

どのように落胆し

どのように落ち込むのか

想像する事なく

人を裏切る

人は裏切られないように  
感情を押し殺すようになる

人は裏切られないように  
本音を押し殺すようになる

そして最後  
信じられる者は自分だけ

本当に  
それでいいのか  
人間達よ

自分も信じていられるか？

## 理不尽

### 夜中

眠らなければ 眠らなければ  
と思いつながら  
頭は 覚醒の一途をたどり

### 日中

眠ってはいけない 眠ってはいけない  
と思いつながら  
頭は 深い睡眠という闇に堕ちていく

### 人間の脳は

自意識とは別に天の邪鬼で  
考えた 思いを馳せた  
方向とは 別の 反対の  
方向へ 突き進んでいく

### 学業や仕事に対し

真面目に取り込んだ人間には  
精神的を深い闇に引きずり込み

### 学業や仕事に対し

良い意味で不真面目に取り込んだ人間は  
その偉業を成し遂げる

反対じゃないのか……  
反対ではないのか……  
真面目が闇で  
不真面目が光輝く

人間の頭は天の邪鬼  
人間の脳は天の邪鬼

### 心

頑張ってはいけない　頑張ってはいけない  
と思いつながら  
頭は　無意識に　懸命の道を歩み

### 精神

負けたらダメだ　負けたらダメだ  
と思いつながら  
病という闇への道を激走する

反対じゃ……  
ないのか……

## 人間なんだもの

『暗中模索』

なんて人間らしい言葉なんだろう

『五里霧中』

なんて人間らしい言葉なんだろう

『一寸先は闇』

なんて人間らしい言葉なんだろう

人は先の見えない道に立っている

人は先の見えない道で誰かと手を繋いで立っている

人は先の見えない道で誰かと手を繋ごうと待っている

『弘法も筆の誤り』

だからこそ前に進めるんじゃないか

『猿も木から落ちる』

だからこそ前を見て進めるんじゃないか

人間なんて間違いだらけ

人間なんて失敗だらけ

人間なんて過ちだらけ

それでいいんだ

だって人間なんだもの

## 子供時代の素晴らしさ

子供諸君！

楽しく生きるよ

楽しく生きれるのは今しかないんだ！

大人になったら

社会に出たら

面倒な事ばっかし

責任という重荷を背負わされ

家庭という重圧がのしかかり

家計という責任が重荷になり

付き合いという面倒を背負い込み

子供という枷が身を縛り付ける

子供であるという事は素晴らしい事なんだ！

いつまでも子供でいられる訳じゃない！

気が付きや大人の仲間入り！

子供は子供の苦勞もあるだろうが

子供は子供という事を満喫しろよ！

じゃないと

大人になってから後戻り出来ないよ

## 悲しい思考

常に生と隣り合わせ

とは言わぬ

人間は

生きているにも関わらず

肉体の枯渇まで

精神の枯渇まで

生きているにも関わらず

常に生と隣り合わせ

とは言わぬ

人間は

生物は

命を得た時より

常に死と隣り合わせ

死は命につきまとい

死は命から離れる事は無い

やがて訪れる

死という

絶対的終末に向かって

人間は

生物は

ただひたすら

歩み続ける

ただひたすら

進み続ける

それが

現実

それが

真理

覆る事無き

現実にて

覆る事無き

真理

でも

そう考えると悲しくないかい？

人間だから

子供時代に大人は言う

『失敗を恐れるな』と

大人になったら上司は言う

『同じ失敗を繰り返すな』と

人間は矛盾している

失敗を恐れず

失敗を繰り返してはならない

しかし人は過ちを繰り返す

同じ失敗を繰り返す

『二度ある事は三度ある』

同じ過ちを

同じ失敗を

何度も繰り返す

けれども

それが

人間らしさ

『三度目の正直』

同じ過ちを繰り返すから

同じ失敗を繰り返すから

その過ちを

その失敗を

繰り返さないようにする

『仏の顔も三度まで』

そう

人間は学ぶ力があるから

『七転八倒』

何度間違えても

『七転び八起き』

何度でもやり直せる

これこそが

人間らしさ

人間である証

## 生きた抜け殻

生きているとは  
どういう事だ

生きているとは  
どういう事なのだ

私は今  
生きている

ただ  
生きている

毎日毎日  
朝目覚め  
夜眠る

息をして  
言葉をはなし  
モノを見て  
音を聞く  
匂いを嗅ぎ  
肌に触れるモノを感じる

生きているからこそ  
感じる事が出来る

生きているからこそ

考える事が出来る

でも

生きているとは

どういう事だ

ただただ

日々を無駄に過ごし

ただただ

日々が過ぎていく

これで

生きていると言えるのか

今

生きているのは

自分ではない

ただの抜け殻だ

抜け殻は生物なのだろうか……

## 〇〈ゼロ〉

全ては0から始まる

必ず0から始まる

今が18なのか

27なのか

34なのか

49なのか

60なのかは

分からないが

全ては必ず0から始まる

0から始まったモノは

数字を1ずつ積み重ね

ゴールを目指して進み続ける

ゴールの数字は誰にも予測不可能で

ゴールに辿り着いた時

初めてゴールの数字を知る事ができる

全ては0から始まる

全ては0から始まり

そして

また0に帰って行く

0は出発点にて終着点

0を拒む事は叶わない

そして また0からの出発が始まる

悪ではない

生まれてくる命に悪はいない

生まれてくるモノに悪はない

生まれた時から悪であるという事は まずない

悪に変わる

悪になる

それは

環境であったり

境遇であったり

選択であったり

想いであったり

いろんな要素が混ざり合い

生まれた命を悪へと変えていく

生まれたモノを悪へと変えていく

だから

純粹に

生まれたばかりの命は

生まれたばかりのモノは

悪である筈がない

そう

紙にペンで書かれた物語も

携帯にボタンで書かれた物語も

パソコンにキーボードで書かれた物語も

生まれた命同様

生まれたばかりの純粹な命同様

駄作なんてない

そう  
思いたい

## 言葉の中に

好きな人との一時の中で

「ありがとう」

「ごめんなさい」

「おはよう」

「こんにちは」

「こんばんは」

「バイバイ」

「また逢おうね」

「今度いつ逢える？」

「一緒にいたいよ」

「ずっと一緒だよ」

「もうイヤ！」

「そんな事言っなよ」

「愛してる」

「本当？」

「好きだよ」

「私も」

「僕も」

「俺も」

「大好きだよ」

「別れたくないよ」

「もう終わりだよ」

まだまだ沢山言葉は見つかる

でも

一瞬の言葉を大切に

あなたの未来は

あなた達の未来は

そんな言葉の中に隠れているのだから

## 言葉の中に（後書き）

とりあえず、目次があまりにも長くなるので、ここで一度切らせて頂きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7697q/>

---

卵から棺桶まで（詩集）

2011年2月11日16時06分発行